

大台ヶ原の価値をひもとく

奈良県立大学地域創造学部
教授 西田 正憲

1. 国立公園の誕生

(1) 候補地選定

1921(大正10)～25(大正14) 内務省嘱託の林学博士田村剛を中心に候補地調査

田村剛(1890-1979) 国立公園の父

1918(大正7)『造園概論』

1925(大正14)『造園学概論』

1948(昭和23)『国立公園講話』

1951(昭和26)『日本の自然公園』

1922(大正11) 内務省衛生局は16ヶ所の国立公園候補地を選定

阿寒湖	→ 阿寒	白馬山	}	→ 中部山岳
	大雪山	立山		
登別		上高地		
大沼		大台ヶ原	→	吉野熊野
十和田湖	→ 十和田	伯耆大山	→	大山
磐梯山		小豆島・屋島	→	瀬戸内海
日光	→ 日光	温泉岳	→	雲仙
富士山	→ 富士箱根	阿蘇山	→	阿蘇
		霧島山	→	霧島

(2) 日本八景

1927年(昭和2)東京日日新聞社・大阪毎日新聞社「日本八景」

八景：山岳、溪谷、瀑布、河川、湖沼、平原、海岸、温泉

<八景>温泉岳、上高地溪谷、華嚴滝、木曾川、十和田湖、狩勝峠、室戸崎、別府温泉

自然科学的分類でわが国の8景観を選ぼうとしたが、結局、八景、二十五勝、百景。この選定は、上高地の例が示すように、壮大な自然景観、新しい自然景観、新たな観光地を産みだし、1934年(昭和9)の国立公園誕生につながっていった。

<二十五勝・平原>大和平原 <百景・山岳>信貴山、大台ヶ原山

(3) 12ヶ所の国立公園の誕生

1927(昭和2) 国立公園協会の発足

1929(昭和4) 国立公園協会 雑誌『国立公園』の発刊

国立公園協会が東京三越で「国立公園展覧会」開催

阿寒湖 登別 大沼 十和田湖 松島 磐梯山 日光 富士 白馬岳 立山 上高地 琵琶湖
大台ヶ原山 大山 小豆島・屋島 別府 雲仙 阿蘇 霧島山 金剛(朝鮮半島)

- 1930(昭和5) 内務省 国立公園調査会の設置
「国立公園候補地概観(10)大台ヶ原山」
(内務省嘱託林学士中越延豊『国立公園』第2巻第3号、1930)
鉄道省 国際観光局の設置
- 1931(昭和6) 国立公園法の制定
内務省 国立公園調査会を国立公園委員会へ改組
国際観光協会の発足
- 1932(昭和7) 内務省の国立公園委員会特別委員会によって12カ所の国立公園を内定
日本観光地連合会の発足
- 1934(昭和9) 風景協会の発足 雑誌『風景』の発刊
- 1936(昭和11) 日本観光連盟の発足

わが国の国立公園

指定年月日	国立公園(戦後は一部のみ記載)
1934(昭和9). 3. 16	瀬戸内海 雲仙(天草) 霧島(屋久)
12. 4	阿寒 大雪山 日光 中部山岳 阿蘇(くじゅう)
1936(昭和11). 2. 1	富士箱根(伊豆) 十和田(八幡平) 吉野熊野 大山(隠岐)
1940年代 1950年代 1960年代～	伊勢志摩 支笏洞爺 上信越高原 秩父多摩(甲斐) 磐梯朝日 西海 陸中海岸 白山 山陰海岸 知床 南アルプス 西表 小笠原 足摺宇和海 利尻礼文(サロベツ) 釧路湿原

【註】()は後に区域を追加編入して、名称を変更したものを示す。

- 1938(昭和13) 厚生省発足に伴い、内務省衛生局から厚生省体力局に移管
戦後 国立公園の増大と国定公園の誕生
- 1957(昭和32) 自然公園法の制定 自然公園体系の確立と自然保護の声の高まり
昭和30年代 国立公園数20の枠→広域化→原生保護思想→特別保護地区重視
→枠突破・新規指定
- 1971(昭和46) 環境庁発足 自然公園が観光開発から自然保護へ大きくシフト
- (4) ツーリズム・ナショナリズム・近代的風景観

国立公園誕生の背景

- ① 外国人観光客誘致・外貨獲得、国内観光客誘致・地域振興
- ② ナショナリズムの高揚と国威発揚
国立公園＝文化装置

我が風景立国の大本を樹立し皇土に東洋最初の国立公園を実現すべき重要使命を有する国立公園法 (無記名『国立公園』第3巻第4号、1931)
国立公園は吾人が父祖より継承せる国土の精粹である。我が神州の精気の凝集せるものであつて、日本の「本来なるもの」即ち国民精神の揺籃、日本文化の培養 床であると同時に亦其具現である。(内務省衛生局長大島辰次郎『国立公園』第4巻第11号、1932)

③ 近代的風景観

ロマン主義・自然賛美・大自然

2. 近代的風景観

(1) 明治後期の大転換

信仰・伝説・歌枕の風景

意味の風景

近景・微視的視覚

⇒

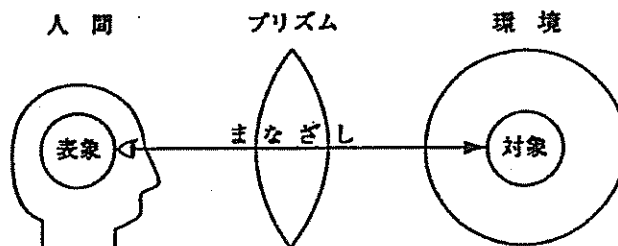
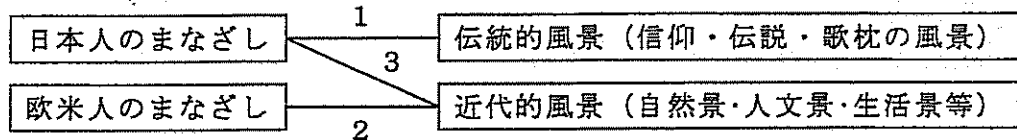
自然景・人文景・生活景等

視覚の風景

遠景・巨視的視覚

(2) 新たな自然景—近代的風景—の発見

日本人は1のまなざしをもっていたが、欧米人の2のまなざしを受容し、新たに3のまなざしを獲得していく。



1888(明治21) 浅井忠《春歌》

1893(明治26) 高島北海『欧州山水奇勝』

1894(明治27) 志賀重昂『日本風景論』

1900(明治33) 徳富蘆花『自然と人生』

1901(明治34) 国木田独歩『武蔵野』

1901(明治34) 島崎藤村『落梅集』

1906(明治39) 武田久吉「尾瀬紀行」 『山岳』 …尾瀬

1907(明治40) 小島烏水「梓川の上流」 『早稲田文学』 …上高地

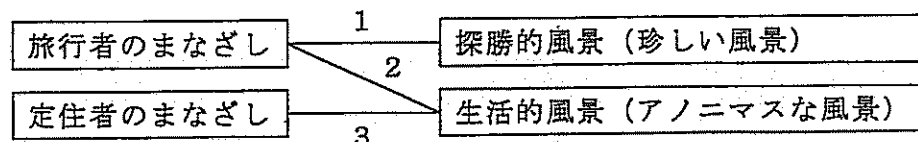
1908(明治41) 大町桂月「奥羽一周記」 『太陽』 …十和田湖奥入瀬

(3) 生活景(アノニマスな風景)・原風景(ふるさと)の発見

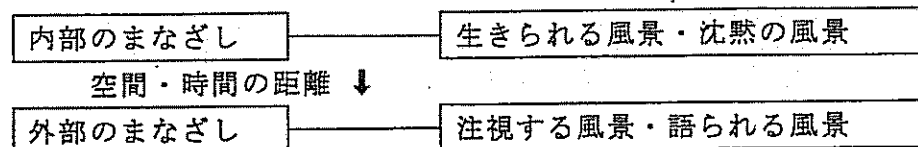
1901(明治34) 国木田独歩『武蔵野』 1898(明治31) 雑誌発表

ツルゲーネフの影響をうけ、新たな見方と詩情あふれる表現で、武蔵野の雑木林・田園の美を広く普及

生活景(アノニマスな風景)の発見



原風景(ふるさと)の発見



3. 大台ヶ原の台頭

(3) 大台ヶ原の台頭

近代的風景観 → 大台ヶ原の自然景

- 1885(明治18) 松浦武四郎の入山・スケッチ
- 1903(明治36) 高島北海『写山要訣』に「大台ヶ原山」の絵画
- 1927(昭和2) 東京日日新聞社・大阪毎日新聞社「日本八景」に選定
- 1936(昭和11) 吉野熊野国立公園指定
- 1964(昭和39) 深田久弥『日本百名山』に選定
- 1974(昭和49) 奈良県が地方公布公債で民有地買上げ→1984~85 環境庁移管
~75(昭和50) 約800haの営造物公園の誕生
- 1980(昭和55) ユネスコMAB計画生物圏保護地域指定
- 1987(昭和62) 読売新聞「新日本観光地百選」に選定

4. 「大台ヶ原国立公園」から「吉野熊野国立公園」へ

- ①「国立公園候補地概観(10)大台ヶ原山」
内務省嘱託林学士 中越延豊、『国立公園』第2巻第3号、1930
- ②「史上の大峰山」
文学博士鷲尾順敬、『国立公園』第2巻第9号、1930
- ③「国立公園候補地としての吉野群山の価値」
国立公園協会評議員・大阪電気鉄道㈱取締役 種田虎雄、
『国立公園』第2巻第10号、1930

我が吉野群山を中心とするものは、史跡に於て、風光に於て、将又大衆の背景に於てあらゆる条件を最も豊富に最も完全に充実するものにして、他の候補地の能く企及し得ざる処なり。斯くの如く吉野より抱擁する地域には大台ヶ原の高原美あり、大峯山脈の山岳美あり、森林美あり、岩石美あり、藩七里の峡谷美あり、加之木の本より潮の岬に至る熊野海岸の絶勝あり、一地域にして斯くもあらゆる風致を網羅充実せるは、全く他に比類を見ざる処なり。

- ④「大和アルプス概観」
内務省神社局嘱託 梅田義彦、『国立公園』第3巻第5号、1931

大峯山・大台ヶ原山を中心とする公園を計画するに当つて是非考慮せらるべきは吉野山と熊野地方とである。之らをも併せ入れることは、公園として、より多く自然と歴史とに恵まれる事となるに外ならない。

- ⑤「国立公園候補地史的概観(9)大峯山と大台ヶ原」
考古学者 柴田常恵、『国立公園』第3巻第12号、1931
- ⑥「吉野及熊野国立公園候補地」
第二次国立公園委員会総会の記、『国立公園』国立公園選定記念号、1932

本候補地は大峯山、大台ヶ原等の吉野群山、北山川及熊野川並びに熊野海岸に亘る一帯を含むものである。本候補地は神武建国以来の貴重なる史蹟伝説に富み、利用方法としては史蹟、社寺巡礼、自然研究、観光、舟遊等に於て特色がある。

⑦「国立公園を語る(二)吉野群山と熊野」

藤木九三、『国立公園』第5巻第3号、1933

第一に古事記その他に載つてをります「神武天皇の御東征」に関する、大和御討入りの次第は、この国立公園の地域全範に亘つて深い関係があります。
この外、大和魂を象徴する「桜の花」で有名な吉野山に関する南朝の歴史は、一々説明する迄もない事と存じます。

* 1333 鎌倉幕府滅亡 後醍醐天皇建武の新政 1336 後醍醐天皇 吉野に南朝

⑧「吉野熊野国立公園概説」

東大名譽教授・理学博士 脇水鐵五郎『国立公園』第8巻第3号、

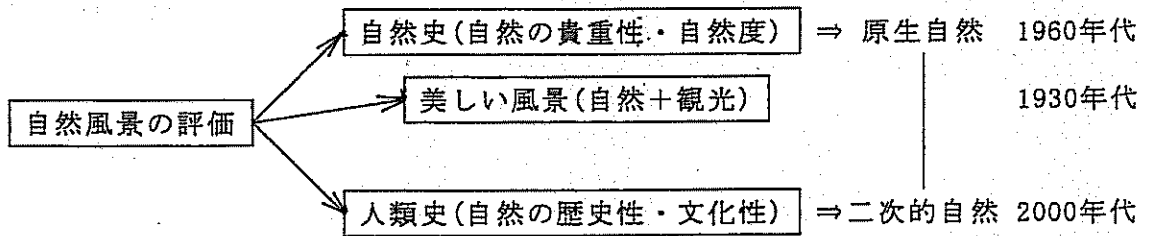
第三次指定記念号、1936

吉野熊野国立公園は我国に於ける海と山との両風景を包含する唯一の国立公園たると同時に水成岩の山岳風景を代表する唯一の国立公園である。
本公園の区域は北部の山岳部と南部の海岸部とその中間の溪谷部の三区に分たれて居る。
大台ヶ原山塊の山頂部は硬砂岩の水平層から成つて居るために紀伊山地回春前の准平原の名残を留めて居ることが特徴となっている。

5. 大台ヶ原の価値

(1) わが国屈指の自然風景

十和田湖・尾瀬・上高地などと並ぶ自然風景

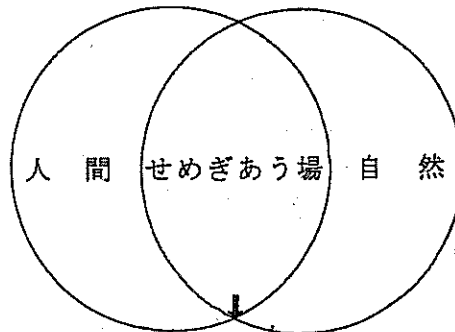


(2) 全国的発信効果

ワイズユースの山
環境保全の取組み
自然再生の先進地

⇒ 光り輝く地域 ⇒ 地域の誇り・アイデンティティの醸成

* 知床の100㎡運動、釧路湿原の自然再生、豊島の環境学習の島、阿蘇の草原景観維持のボランティア活動、屋久島の環境文化村構想

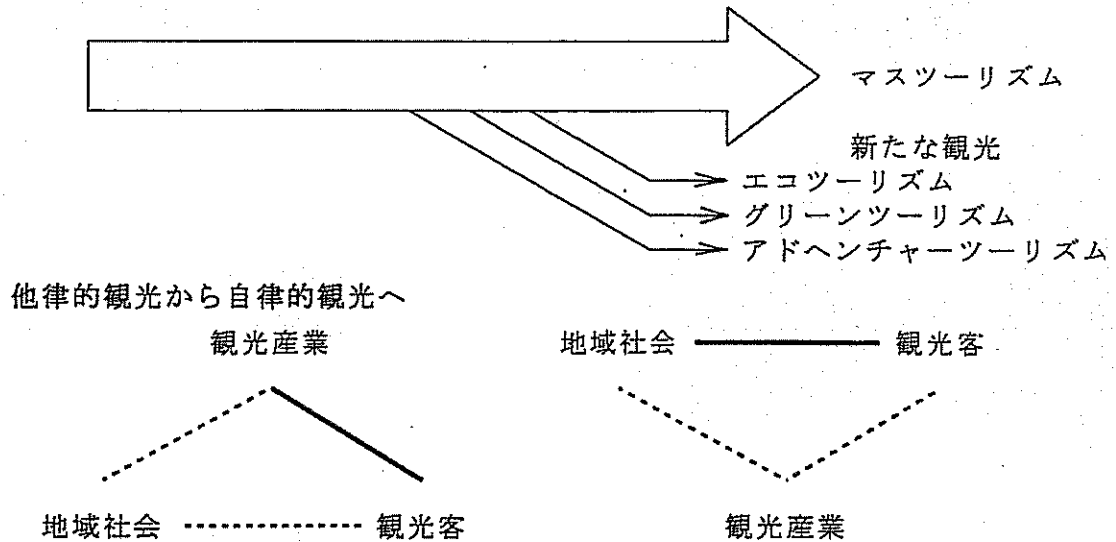


環境教育・環境文化 ↓

エコツーリズム

環境保全型観光
深い自然体験
地域活性化

(3) 新たな観光—エコツーリズム—



(4) 環境教育・環境文化

これからの社会においては、環境教育、環境文化が大きなテーマとなってくる。
 <環境>をキーワードとした地域創造、環境教育・環境文化の普及が重要。

枠組みの変化

	20世紀	21世紀
社会の枠組み	成長 人口増加 経済発展・経済の豊かさ 中央 均質化・同一性 物（物質文明） 合理主義・効率主義 生産・消費・廃棄	→ 持続 人口減少 環境保全・自然の豊かさ 地方 個性化・多様性 心（精神文明） ゆとり・やすらぎ・いやし 循環
地域の活性化	地域開発—経済・産業	→ 地域創造—環境・文化・社会等
観光のあり方	マスツーリズム	→ 新たな観光

— 西田正憲（にしだ・まさのり）略歴 —

奈良県立大学地域創造学部教授 農学博士
 [専門] 風景論 環境論 自然公園論 エコツーリズム論
 [経歴] 1951年 京都府に生まれる
 1973年 京都大学農学部林学科卒業（造園学専攻）
 1975年 同大学院農学研究科修士課程修了
 [著書] (単著)『瀬戸内海の発見』中公新書(1999)、『自然と共生する観光開発』日本文教出版(1999)
 (共著・分担執筆)『国立公園図鑑』大蔵省印刷局(1995)、『鷺羽山』日本文教出版(1997)、
 『瀬戸内海の文化と環境』瀬戸内海環境保全協会(1999)、『ランドスケープ空間の諸相』角川書店(2000)『地域創造用語事典』湾岸域環境研究所(2001)、『ランドスケープのしごと』彰国社(2003)、『地域創造へのアプローチ』IBCコーポレーション(2003)
 [受賞] 1998年田村賞（国立公園の父田村剛に因む賞）、1999年日本造園学会賞（研究論文部門）